

第3回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成17年7月12日（火）午後9時30分～午後0時30分

2 場所 長野県諏訪合同庁舎 講堂

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
小林 辰興委員	小池 博委員
小口 武男委員	関 哲夫委員
北原 曜委員	北原 秀樹委員
	藤本 功委員

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

みなさん、おはようございます。

今回は、お忙しい中、また暑い中をお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、委員長さん、始めていただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

みなさん、おはようございます。

雨で足元のお悪いところ、ありがとうございます。

それでは、開催いたしたいと思います。座らせていただきます。

議事に先立ちまして、事務局から全体へ、調査資料、または昨日の県議会の方向、ならびにその他の資料等の準備をいただきますので、それからまずご説明をいただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

5 資料説明

（吉江高校教育課長）

みなさん、おはようございます。

早朝からお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

私は、高校教育課長の吉江でございますが、今、委員長さんからお話しいただきました関係で、この委員会におきましては、去る6月27日に開催をされまして、その後のそれぞれの委員会、ほかの委員会も開催されたり、あるいは議会の動き等もございましたので、その点につきまして、若干報告させていただきご理解をいただきたいと思います。

こちらのほうの委員会が開催された後、第3回目という形で、まずは第2推進委員会、東信地区の委員会が7月3日、それからさらに第4推進委員会、中信地区の委員会が7月

10日にそれぞれ開催されまして、それでこの委員会が第3回目ということで本日開催された次第でございます。

それで、第2推進委員会のほうで申し上げますと、この委員会の場合には、実は私どもが候補案を出した6月24日の前の、6月19日に第2回目を開催した関係がございまして、それでこの委員会におきまして、6月27日にこちらでもご議論いただいたような、候補案を出した時期などについて、いろいろなお意見をちょうだいいたしました。

それで貴重なご意見が出つつも、最終的には、この候補案は候補案として、いろいろ魅力づくりとか、そういうような議論を重ねていこうというようなことで、今後を進めていくというようなご判断をちょうだいした次第でございます。

また、7月10日には、中信地区の委員会がございまして、これにつきましては、地域校の抱えております問題といたしますが、いわゆる「魅力づくり」、または中学生が実際に望む学校とは何ぞや、さらに申し上げますと、果たして実業高校といたしますか、普通高校を求めるのか、あるいは専門高校を求めるのかというような議論などの関係につきまして、いろいろなお意見が出た次第でございます。

県議会の状況をお伝えしたいと思います。県議会につきましては、非常にいろいろなお意見をちょうだいした次第でございますが、全体の中で15人ほどの委員さんが一般質問に立たれた次第です。改革プランの関係をいただきまして、その中で3名の議員さんから賛成のお立場でご意見を出されておりました。

その中で、議論が出ましたものとしたしましては、例えば改革プランの策定のスケジュールはどうなっているのか、あるいは、私どもが申し上げるところのスケジュールでございますが、年末までに推進委員会に報告を求めて、年度末までに実施計画を作成するというようなスケジュールは、あまりにも急ではないかとか、さらには候補案うんぬんを白紙撤回するべきではないかとか、あるいは6月14日、6月24日の委員会の議論そのものが非公開になっているわけなのですが、その内容がどうだったのか、あるいは、具体的に今後再編整備を行っていくにあたっての予算的なものがどのぐらいなのかなどというようなご意見も出た次第でございます。

それにつきまして、それぞれ教育委員長、あるいは教育長職務代理者が、お答えしたことが報道等されているわけですが、実際問題とすれば様々な面があるかと思います。

この結果といたしまして、あのような新聞紙上でございますように、いわゆる白紙に戻して、慎重な議論を求めるというような意味合いの意見が出た次第でございますが、私どもといたしましては、これにつきまして、現在進めていただいておりますそれぞれの推進委員会がございまして、その推進委員会におきまして議論を尽くしていただければと考えている次第でございます。

若干の経過および県議会のご意向等につきましては、以上でございます。

よろしく申し上げます。

引き続きまして、資料につきましてご説明申し上げます。

資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から説明 【説明内容省略】

6 議事

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

各校の「魅力ある」取り組みについての一覧というのは、先ほど事務局のほうから、ご説明が最後にありました内容につきましては、また、議論が進行する中で、それをご参考に準備をしていただきたいということで、後ほど検討していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、質疑に入ってまいりたいと思いますが、前回、この第2回におきまして、財政問題につきましてそれなりに議論をいただいたわけですが、方向として確認をいただいておりますので、特に意をここで、変えるということはありませんが、藤本委員のほうから、これについての思いがあるようでございますので、あらかじめご発言をいただきたいと思います。

(藤本委員)

すみません。岡工の藤本です。

前回、各委員さん方から、財政問題については非常に重く認識する、統廃合もやむを得ないという認識を持って行くと話されたと思います。

私も、各委員さんの発言、それから前回の委員長さんのまとめに、「うん」ということで帰ったわけなのです。でも新聞報道等で、「財政問題で高校統廃合もやむなし」ということで大きく出ていたわけですが、この委員会で、これで結論が出たということになってしまうと、どうも気になるものですから、最初お時間をいただきました。

特に前回、岡庭委員さんが、財政問題については、責任ある財政の見通しをきちんと出して、別の部門できちんと議論すべきだと発言されましたが、私も、第3通学区だけの問題ではないと思うんです。やはり、知事を含めて、県民が教育をどれだけ重視して財政負担を認めるのか。

教育のためだったらお金を出すのか県民的な議論がされるべき課題であって、確かに、将来は非常に厳しい状況は、私もよく分かるのですけれども、そういう将来的な見通しがまだ分からない、なかなかシミュレーションができない、やはりそういう時点で、不確定な要素である財政問題で、まずもって統廃合ありきと、もうここで結論付けしないで、厳しい財政を、非常に重い課題として認識するんだということではないか。

ここで何とかみんなで知恵を出して、子どもの学習権を保障するために知恵を出して、こうとスタートした第2回目の会議ですので、結論付けしないで、県民的な議論を行ったほうがいいのではないか、気になりました。

現に、旧12通学区ごとの地域懇談会で高校教育課長さんは、財政問題とは関係ない明言されていたことを記憶しておりますので、私は、ここで、もう結論付けて、このままだということではなくて、ぜひ、県民的な、教育にどれだけの金をかけるのかという議論を皆がやっていていただきたいなと思います。前回の委員さん方のお気持ちは、そのとおりだと私は感じております。

(池上委員長)

ありがとうございました。そういうことでございます。

ぜひ、バランスをとって議論を進めるということだと思います。

それでは、次の議論に進めて行きたいと思いますが、冒頭に、県の委員会におきまして、この第3通学区の、諏訪、ならびに上・下伊那という仕分けの中で、夕べもその話でございましたが、たたき台とはということでしたが、いずれにしても、たたき台という試案が示されておりますので、その客観性について、委員の皆さんからあらかじめ質問がございましたので、事務局のほうにご説明をいただきたいと思います。

よろしくお願ひしたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

第1回目よときの資料7ということになりますけれども、「区別の中学校卒業生数について募集学級数の推移」というところで見ているときに、第7区、第8区、第9区で見まして、平成17年の学級数からの推移の中で、第7区、第8区、第9区それぞれ減があったりするわけですが、特に第7区につきましては、平成30年に至る範囲の間に、現在のところから増えるような状況もございまして、今後の10年以上にわたっては、ほぼ学級数が変わらないということがございます。

それで、その次の年から減ることになりますけれども、そういう意味では、2つのことは違うかなということがございます。それが、下のほうにあるところです。

また、第7区につきましては、第3通学区以外からの流入もあり、また第3通学区の中で見たときに、第8区から第7区への流入もあり、ここに示された数字以上に、実際には生徒が入り込んでいるということから、再編整備は大変なのではないかということでございます。

(池上委員長)

この流れの件は、先回も出ておりましたが、部会設置というお話にもつながってまいりますので、少なくとも第3通学区としては、かなりの議論を詰めていただく間で、その上でこういう結論に到着させるということに相成ると思いますので、あからさまに申し上げれば、諏訪は、「また上・下伊那の問題だ」というように言わないように、調整がいただければありがたいということでございます。

(北原曜委員)

今のことについては、ご見解に対して、資料をお持ちしましたので、意見をいただきたいと思います。

この第3通学区の高校改革の議論には、ちょっと向かないということで、私の名前で提出したものです。その2ページ点目をご覧ください。

幾つか、第7区に対する無傷と言ったら語弊がありますが、それに対して反論したいと思います。

まず、中学卒業生の減少率に関する問題です。これは、平成17年と平成31年を比べると、確かにこういう減りが少ないわけなのですが、そもそもこの県立高校89校ということ、

それから平成2年のピーク時がその『最終報告書』の基本となっているということからすれば、第7区は、平成17年に向かって急激に減っているのです。それからゆっくりと減少しているということになります。第8区、第9区は、コンスタントに減っているということになるかと思います。

それで、平成31年の中学卒業者数を見てみますと、それほど大きな違いはないということだと思います。そうなりますと、第7区だけが何も無いというのは少し変ではないかなということになります。

それから、(2)で旧学区ごとの高校数に関する疑問もあります。今、9対8対8という高校数ですが、県教委の案ですと、9対6対7となって、非常に不均衡が生じてしまう可能性があるということです。

それから、今、流出数についても、事務局のほうからご説明がありましたが、流入数マイナス流出数が、第7区では平成16年と平成17年の平均ですが、215名ある。第8区は、マイナス152名。第9区は59名ということになりますが、構図としては、第7区へ第8区から3クラス分、それから第9区へ1.5クラス分が流出していることになります。つまり、空いているから行くわけです。流出するのであるということは、空いているからこちらのほうに流入していくということですから、この段階で、第8区から高校数を減らしてしまうということになると、さらに行かざるを得なくなる。流出していくということになれば、これは、保護者に非常に負担が生じてしまう可能性があるわけです。これはちょっと疑問ではないかということです。

それから、高校の立地に関する問題もある。第8区も、第9区もそうですが、分散して建っております。飯田はある程度集中するところもありますけれども。第7区は、岡谷から諏訪にかけて7校が集中しているわけです。県教委のスタンスとしては、市町村、学校が広い範囲にわたっている場合で、その過疎化の可能性のあるところの高校はなるべく傷つけないという見解であったかと思うのですが、それに対して、集中しているところをなぜ残すのかという疑問があります。

それから、もう1点、工業高校の一件です。工業高校が、今回の方向では狙われた感があるのですが、工業科なり職業科の在り方は、ひとつの大きな問題だと思います。今回、工業高校あるいは工業科を減らすという方向については少し疑問を持っております。3ページの上のところを見てください。職業科の問題は少し置いておいて、これはよく議論しなければいけない問題なのですが、そのほかに、第7区、第8区、第9区の各科のバランスを見ていきたいと思います。そうしますと、第7区が突出して普通科が多いのです。それで、工業科、商業科、農業科については、家政科も含めて、バランスがいいとは申し上げませんが、まあまあかなと思って、第7区だけ突出しているというか、こういうのは少し疑問に思っているところです。

それから、県教委の案では、赤穂高校と駒ヶ根工業の統合案が出ておりますが、どのようにするのかこの位置付けがよく分からない。

それから(7)として、長姫と下農の統合、総合学科設置ということなのですが、両校には普通科がありません。普通科がないにもかかわらず、統合して総合学科設置することは可能なのかどうか分かりません。第1通学区、第2通学区にそれぞれ普通科が入っているのです。

それから、8 番目として、改革案全体についての問題としまして、第 1 から第 4 までの各通学区に、1 校ずつ多部制・単位制、総合学科ということで配置していますが、これが本当にいいものなのか、画一的な配分ではないのかというような気がします。例えば、ある通学区では、総合学科が 2 つあっていいのではないか。多部制は、ある通学区はなくてもいいのではないか。こういうようなこともいいのではないかと思うのですが、このような視点でも考えることも含めてお願いしたいと思います。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

それでは、小林委員どうぞ。

(小林委員)

お願いしたいと思います。

今、北原先生が言っておられる視点については、私は少し異論がありますけれども、その前段の 3 番については、私は、この考えにとっても賛成であります。

先ほど北原先生がおっしゃったことに、少し付け加えさせていただきますと、私もいろいろ調べてみたのですが、平成 31 年と現在と比較したときに、減少の人数は、旧第 7 通学区が 286 人、旧第 8 通学区が 300 人ある、大して変わっていません。確かに、第 9 通学区は 488 ございますので、多いことは多いのですが。

多分、県で考えたのは、このことよりも流入を重視しているのではないか。確かに流入は、上・下伊那で 200 人近くあります。ところが、こういう分析を提起すべきかなと思っているわけですが、平成 16 年度の場合に、最終的にどれだけ定員割れをしたかという不足数は、第 7 通学区が 48 人です。48 人も不足しているわけです。それから、第 8 通学区と第 9 通学区は、12 人と 11 人で非常に少ない。なぜこういうことが起きるのかということの分析が必要かなと思うのですが。

正直に申しますと、私は辰野の人間ですので、いろいろ分析しましたが、例えば、辰野中学は、本当に諏訪に隣接していて、諏訪といっていけるだけの学校だったのですが、平成 12 年度、平成 13 年度、平成 14 年度に、諏訪地域へ行く生徒が非常に減っています。平成 12 年度は 60%でした。平成 14 年度になると、何と 36%に減っております。

下伊那と隣接している中川中学も、やはりまったく同じ傾向で、平成 12 年度は 60%が下伊那へ流れた。ところが、平成 14 年度になると 40%減っている。こういう生徒の状況を、あまり固定的に見てはいけないと思います。なぜかといったら、確かにかつては諏訪へ流れて行く事由はいろいろあったわけですが変わってきたのは、やはり上伊那の高校は、高校改革を一生懸命やってくれたためかと思います。しかし、結果的には上伊那があぶれてしまって、諏訪が足りなくなるという状況はずっと今までも続いております。

従って、そういうところの構成から考えても、上伊那が 2 校を対象にして、諏訪が何もないというのは、さらに上伊那が他地区へ動かないとやっていけないという、流出を加速させることになるということで、私はこの前も言いましたけれども、そういう点から、やはり旧第 7 区、第 8 区、第 9 区は、どうしても再編するというなら、1 校ずつという公平なやり方をやってほしい。

以上です。

(小坂委員)

今、北原先生とそれから小林委員さんのほうからお話でしたが、私も、市長会という立場ですけれども、この3郡の在り方を考えた場合、少なくとも私は、3校減だから、各郡1校減だと、それがこの改革プランの骨子になるだろうというように思っていたわけです。ところが、ふたを開けて高校再編を指摘しましたけれども、上伊那は3校ということになってしまって、諏訪はゼロということになった。

私は、資料をひとつお願いしたいと思いますけれども、旧第7通学区から旧第9通学区の、諏訪の第7通学区、それと先ほどもお話しされたように流入をいたしている。特に私立も含め、東海第三高、工業科では岡工、清陵、それから松本方面へも流出をしているわけです。深志へ行ったり、あるいは工業系の私立の塩尻へ行ったりということがありますから、それらの資料をきちんと出していただければ、私は、上伊那が2校というのは、どうしても納得できない。

少なくとも、これから、いずれにしろ、この高校の減というのは、財政問題はもののことですが、将来的にわたって現行数でいいものかということ、そうではないと思います。将来にわたって、また与えられてやっていかなければいけない時期がやがては来るので、そうした場合には、やはりここでは3郡ということになれば、1郡1校というひとつのたたき台を、どうして県のほうでは出さなかったのか。流入が多いからいいというのか、先ほども北原先生の資料を見ましても、減少率は、特に第7通学区は減少していないわけですから、その辺をも十分考慮する必要があるだろうと私は思っておりますけれども、いかがでしょうか。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(小林委員)

申し訳ない。ちょっと言い足りないことがありましたので。

もうひとつ、諏訪に流入があったのに、何で、結果的に定員割れするかという私のもうひとつについては、諏訪地区の独特のことだと思うのですが、県外へ行く生徒が非常に多いわけです。今年の場合に133人が県外の高校に行っているんです。これは上伊那や下伊那ではあまりなく異例なことですが、そのことと諏訪と松本に有力な私立高校があるということも関連して、結果的に流入があって、数がそれにありながら、ここ数年そういう状況が続いているということです。

北原先生がおっしゃるように、今後どういう視点でやっていくかと、この前も私が言いましたけれども、今回の「魅力ある学校づくり」を、さっきざっと読ませていただきましたけれども、やはり地域高校といわれる職業系の高校は、とてもやりやすいところがあると思うのです。ところが、普通科高校で、進学もするけれどもそれもしていないという学校の改革づくりが、非常に難しいなということを見させてもらって、特に諏訪地区にそう思いました。そのはっきりしない学校が、少なくとも3つくらいはあるので、どう

してもやるというなら、こここそ再編の対象にすべきだと思います。

以上です。すみません。

(池上委員長)

上・下伊那の皆さんのご意見をいただくことについて、意見がございますでしょうか。

(笠原副委員長)

私も、それなりに諏訪地区のいろいろなところの意見を探ってもみたんですが、どうも改革案、案として諏訪が1つも出なかったというようなことの中で、今のところは静かにしておけという雰囲気を感じたわけです。

しかし、統廃合の問題は別としても、私自身は何らかの形で、やはり諏訪地区の学校も、この前の会議で小口委員さんでしたか、諏訪もジョイントというようなことを考えるべきだというお話がありましたけれども、私もそういうようなことを諏訪の者も検討しながら、南信地区全体で改革を考えていくという方向でいかなければいけないのではないかなと御もいます。

統廃合がなくても、できるかできないということは別問題として、そういう意味で、私はこの前、各地区の審議委員会のようなものが必要なんだなというように感じていたわけです。

以上です。

(池上委員長)

小池委員、いかがですか。

(小池委員)

前回、校長会で欠席をしました。経緯が分からないので黙っていたのですが、やはり「たたき台」を見たときに、諏訪だけがないということは、少し検討の材料になるだろうというところです。ただ、北原曜先生が言われるように諏訪に向け、生徒が流入しているように見られておりますけれども、これは、過去の調整区からの関係というものがあるわけです。

それから、比率的「諏訪が空いている」から入ってくるというよりも、現実的には諏訪のほうでも(先ほど130人程と小林委員が言われましたように)山梨県へ生徒が流れ出ていくという現状があります。そういう経緯もあることを、まず確認いただきたい。諏訪が空いているから、第8通学区から入ってきているのではないということです。数的なものではなくて、歴史的なものとか、また大学進学に向けてと言いますか、そういう進学校にかかわるような部分も、そのひとつにはあると言えます。その上で流入の結果諏訪の子どもが山梨のほうへ、押し出されているというような、歴史的な経緯があるんです。

次に、どここの学校を減らす、減らさないという改編問題については、最終的な結論のところでは求められるのでしょうけれども、今はやはり、子どもたちが高校で、本当に主体的に自分で輝きをもって学べる「高校づくり」をどうするかという、その視点を進めていくべきだと考えます。結論を急ぎどこを減らす、どこを減らさないとそれでいいのか。

私は、今日の会議に来るのは非常に嫌だったんです。多分、今日上伊那の方々からこのことについて言われるのではないかと。それに対して数の推移のデータからは反論ができない部分があるわけで、その辺のところ（魅力ある高校づくり）を考えるなら、あまり痛み分けのような論にならないことが必要ではないかと思っているわけです。

（池上委員長）

ありがとうございました。

どうぞ、熊谷委員。

（熊谷委員）

すみません。

今の、上伊那と諏訪と、という話が出ているのですが、下伊那の話を若干させていただきます。

実は、飯田で高校改編問題を考えるシンポジウムというのを昨晚地元で行ったわけでございます。約 500 人近い住民が集まりまして、3 時間近い内容で行いました。内容的には公民館が主催する、住民講座ということでやりましたので、特に結論を出すとかいうものではございませんでしたけれども、その中では、飯田市長からの質問に対話を実際に重視するというような日程も出される中で、これから議論をしようというような雰囲気であったという形のものが私は感じさせていただきました。

そんな中で、特に今日出ているように本当にやはりそれぞれ 3 地域から、それぞれのうしろにある歴史なり背景なりをもっているものを、ぜひ反映してから改革論議を尽くしてほしいという意見があったというように私は思っておりますので、ぜひ、前回もお話ししました部会の設置について、前向きにご検討いただきたいと思います。

県教委のほうも、やはり部会を設置したら地域の声を聞くという姿勢を示しているわけでありますから、あえて部会の設置を危惧（きぐ）する必要はないと思うので、当然部会の論議でうんぬんという話になって、部会を設置して地域の声を吸い上げるという議論を持たせるというような必要ではないかと思っている次第です。

補足して実は、その中の発言の中で、意図的ではないと思うけれども、この委員の構成が、諏訪 6 人、上伊那 5 人、下伊那 3 人ということで、私はそう言われたときに、3 人のうち、1 人は村長さんですし、1 人は中学校の保護者代表という形でありますから、1 人でこれだけの皆さまの思いをしょってこの委員会に入りますのはとてもつらいので、ぜひ飯田の地へ出向いて、県教委としてもみんなが議論をよく聞くような機会を、ぜひもってほしいなということを思いました。ぜひ部会の設置について、前向きにご検討いただきたいと思いますように思います。

以上でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

私も拝聴しておりましたけれども、やや偏ったご意見かなというように思いましたが、いずれにしてもご意見は議論の参考といたします。

今、小池委員のお話のように、諏訪を攻める形になってはまずいのですが、しかしながら、合理性のある意見を闘わせる立場では、絶対これは欠かせないわけでございます。

丸茂委員、いかがでございますか。今の諏訪と上・下伊那と、地域について。

(丸茂委員)

やはり小池委員のお話にもございましたように、諏訪では、山梨県の高校へと子どもたちが流出していることは事実です。諏訪地区の高校に入れなかったから山梨県に行くのではなく、茅野市の中学校の中では、山梨県の進学校に行かせるご家庭が多いと聞いています。そういうことから、やはり地元の高校に残らない子が出てきているかなということは感じました。

諏訪は、統廃合の対象校は無かったからといって、「やれやれ」という気持ちを私は持っていません。そう言いますのは、「校名が拳がったから困る」と言いつつも、独自の「改革」を始めていない高校がほとんどでして、その高校が、ここで該当しなかったから「まあ、よかった」と収まってしまっただけで、諏訪地区における高校のレベルがそのまま停滞してしまう、温度が下がってしまうのでは、ということを心配しておりますので。

私は諏訪地域に住んでおり、近くには茅野高校がございまして。茅野高校は、今、高校改革を独自に進めているところですので、このまま進めて行ってもらいたいと思いますし、地元の子どもが地元の高校に多く通えるような改革を進めて欲しいと思いました。

ですので、ここで統廃合の数を議論するよりは、まずどんな高校づくりをしていくかというところから入っていったほうがどうでしょうか。改革プランの順番の最後に、統廃合の問題に取り組むになっていきますので、まず高校がどうあるべきかということ語ってから、数をどうするのかというように持っていってもいいのではないかと思います。

(池上委員長)

ありがとうございます。

大方の委員の皆さんのご意見を拝聴しました。まず、これはもう最後まで聞いてしましましょう。

関委員、いかがですか。

(関 委員)

諏訪の問題が、だいぶ議論に上っているところでございますが、私は基本的には、どの年度を基準にしてもいいと思うのですが、教育委員会から出ていますこの資料の、募集学級数のところを見ていくべきだというように思います。

単純に、ただ中学の卒業者数だけではなくて、そこにいろんな要素が絡まってこの募集学級数というのが出されているわけですが、この募集学級数で見れば、諏訪地区は現在で46クラスで、平成31年には43クラス、第8通学区は現在39クラスが予定では34クラス、それから第9通学区は38クラスが31クラスと、現在からの学級数は減っていくわけです。

学校というのは、やはりある程度の規模がないと活力というものが生まれませんし、そういう意味では、この学級数を一番の根拠にしていけるべきではないかというように思っております。

それから、流入の問題ですが、先ほどからも幾つかそういうお話が出ておりますけれども空きがあるから流れてくるということではないと思います。確かに、諏訪からの流出というのは県外もありますし、あるいは松本地区への流出もありますが、県外や松本地区に空きがあって、入れるから行くわけではない。

それから、本校の場合でも上伊那からの流入がこのところ増えていることも事実であります。上伊那地区に住んでいる保護者の方が、本校へお子さんを入学させたいというような意向もあると聞いております。そういう意味で、年々変化するということで、私は流入、流出の問題は流動的なことから、一概には言えないだろうというように思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

川島委員、いかがですか。

(川島委員)

私もタベのシンポジウムに出席させていただいたところなのですが、まずその感想から申し上げますと、高校教育課長さんのご説明は、端的でよしかったと思うのですが、その財政の問題というのは、問いかけといいますか、それがまた難しいのではないかなという気が非常にいたしました。昨日、配布した資料の中でも、前回お配りいただいたその資料の 13、「長野県一般会計教育費の推移」というこの表は配られませんでした。こういった切羽詰まった財政問題というものが、やはり一般の方々には全く理解されていないということを非常に感じました。

だから、ご意見の中でも、生徒数が減るのだから、学級数を減らすという必要はなく、生徒数が減れば 30 人学級にすればいいんだといったような、お金のことを全然考えない議論になってしまっているような気もいたします。むしろ、もっと財政的な切迫感といったものは、やはりもっと議論していただいて、ある程度共有した認識に立って、先ほど冒頭に出ましたように、それでも教育費を守るのか、それとも教育費も、もはや削らざるを得ないのかといった選択を迫るべきではないかという気がいたしました。

少しその点に関連して、今日お答えいただくということはないのですが、ベースの財政的な問題として資料をご提示いただきたいことがございます。旧第 9 通学区で、長姫高校と下農の統合ということが議論されておりました、この改革プラン検討委員会の資料によりますと、その資料の 16 ページ、1 学年 1 学級規模の場合のランニングコスト、それから 6 学級規模のランニングコストといったような資料が出ておりますが、配布していただいている学校要覧のところを拝見いたしますと、現在、飯田長姫も下伊那農業も 1 学年 4 学級なのですが、この資料の 16 ページにある 1 学年 4 学級規模の B 高校というのは、教員数が 35 人という設定で計算されております。これはきっと普通科高校を考えていらっしゃると思うのですが、配布していただいた学校要覧等を拝見すると、飯田長姫高校は教職員数が 61 名ほど、それから下伊那農業高校も 69 名ですけれども、当然 35 人という規模ではないのです。

ですから、改革の総論議の前提とするのではなくて、現在飯田長姫高校のランニングコ

ストがいくらあるのか。下伊那農業高校のランニングコストがいくらなのか。それと統合した上で、その総合学科ということを考えていらっしゃるようですので、例えば、塩尻志学館高校のランニングコストがいくらなのかといったような数字を、ぜひ教えていただきたいという気がいたしました。

以上です。

(池上委員)

ありがとうございました。

小口委員、お願いします。

(小口委員)

まず諏訪の問題については、私は前回もお話ししましたとおり、やはり高校統合問題は避けて通れない問題だと思います。

というのは、先ほど丸茂さんがおっしゃいましたけれども、ちょうど私には高校、中学生の子どもたちが4人おります。そして、私の長女は山梨の中学校に行きました。少し通学が大変だったので、高校になって諏訪の学区に入ってきたのですけれども、やはり塾の先生が、どこに行くか決めるときに、ここの学校はこういう特色があるということで、「あなた、ここはどうですか」というように勧めるのです。そういう意味では、親も、その塾の先生のお話を聞くと、「ああ、そうか。この学校はこういう特色があっそうなんだ」というようなことで、やはり学校の特色を求めている感じがします。

その結果として、やはり山梨がいいとか、あるいは佐久がいいとか、あるいは松本がいいとか、残念ながら諏訪地区はかなり流出が多いのでございます。特に言えば、優秀な生徒さんほど、そういう行動に移るような気がしておりまして、特色有る学校を諏訪地区にどのようにつくっていくか。それは諏訪地区の問題だけではなくて、それぞれの地域でどのようにつくっていくかという話をしていけないと思います。

それから、先ほど川島さんからお話がありましたけれども、やはり財政問題というのは非常に大事なことで、地域色のある学校や進学校など、学校の特色づくりは必要ですが、地域色ある学校を地域に残したいならば、その地域としてどのように学校に支援するのかというようなこともないと、学校だからただそこにお金を落として良いとすわけにはいかないと。また、特色づくりに地域の人がどのように舵を担っていくかという事も必要だと思います。 以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

北原秀樹委員、どうですか。

(北原秀樹委員)

中学校のほうからということで、そういう立場からお話をしたいと思います。

上伊那ですので、2校が、統廃合また多部制になるということについては、かなり中学校の進路等を考えると、やはり今学校としては深刻な問題だと思います。

特に箕輪工業さんは隣の高校です。生徒さんが、朝、学校に訪ねてきて、「署名をしてください」と、「今、活動をしています。」「1人で100人集めなきゃいけないんだ」というようなお話で、学校の体質ということもあるわけなのですが、先ほどから出ていますが、この改革について工業科の学校を狙い撃ちというわけではないのですが、その辺に普通科ではなくて職業科をとという感じを受けます。

箕輪工業高校さんが「どうこう」というわけではなくて、どこを統廃合させるか、どこを単位・多部制にするかということについては、また考えていけばいいことだと思うのですが、今「ニート」という問題がかなり言われていますが、普通科を優先させて残していくということがいいのか、もう少し職業科等を重視して高校改革を進めていったほうがいいのかということも思っています。

それから、箕工さんについて言いますと、特に以前は、だいが生徒さんを見ても、これで本当に高校生活を送っているのかなと疑問に思う生徒さんがたくさんいたのですが、やはり改革というか、かなり努力をしています。努力をして、だいが落ち着いた雰囲気为学校になっていますので、そういう努力をしてきた学校というのは、やはり認めてもらいたいと思います。改革をしてきた学校は、どういうことをやってきたのかなということを確認していただいて、そういうことも考えた上で改革を進めてもらいたいなあとと思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

大変貴重なご意見が多かったと思います。今の上・下伊那、諏訪の問題は、全体として、むしろ「魅力ある高校」をどうするかということが、議論が先行して、その結果、帰着するところに帰着するというように考えておりますので、それはむしろ「魅力ある」という世界を先行させて、その後で、皆さんがうまく議論があって、こうなんだということであろうというように考えております。まずはまず、「魅力ある高校」ということになると思います。

それから、財政の問題については、具体的なお質問がございましたので、合わせて、先ほども地区別の高校の問題と財政の問題の2つに分けて、事務局のほうからご説明がいただければありがたいと思います。

(吉江高校教育課長)

すみません。本当に熱心なお助言をありがとうございます。

それで、北原先生のお話にございましたいろいろな資料でお見せいただきまして、誠にありがとうございます。

いろいろいただいている意見も、それで、先ほど来いただいているものの中で、私のほうから、若干今後の見通し等につきましてお話を申し上げたいと思います。

まず中学校の卒業者の減少がらみで、第7通学区もというお話をちょうだいしました。これにつきましては、もちろん、こういうようなご意見はひとつのご意見でございますので当然かと思えますし、またその辺につきまして、私どものほうの考えだけ少し述べさせていただきますので、その上で、それがあくまでも、当然ながら皆さま方で、今後議論をぜひ深

めていただきたいと思います。

ここで、もしよろしければ、『最終報告』の18ページをご覧くださいと思います。

『最終報告』の18ページの中ほどに、第1案から第4案までございます。それで、この第4案に「現行の「生徒ひとり当たり教育費」の水準を下げないように学校数を決める」という案があります。これは、まだ案でございますので、これは当然採択されたわけではないのですが、その考え方によった場合どうなるかというのが19ページでございます。

その19ページに、そういうやり方をした場合に、幾つになるかというようなことも出ていますが、上から7行目、第4案は、「パーヘッド」の方式によるものであり、公立90校を基準に、平成2年の総数で考えるなら、例えば平成16年度は60校、平成31年度は50校になるというようなことになっています。

これは当然ながら、県の教育委員会でもまったく議論されなかった内容でございます。それで、ある意味で北原先生がお考えのようなイメージというのは当然でございますが、ただ私どもが先ほど来、若干お話に出ておりまして、また別途資料にもお示ししてございますように、18ページに戻っていただいて、基本的には、18ページのグラフにありますように、今後、例えば、平成17年、平成18年をスタートといたしまして、そのいわゆる網掛けで塗った範囲の中に収まるような学校ということを想定したとして、76校というような想定をさせていただきました。

そんなことを考えますと、実は、今後の生徒数をベースに、それぞれの学校というようなことの配分を考えた次第でございます。その中で、先ほど来話が出ておりますように、このような形で見ますと、確かに第7通学区につきましての考え方はいろいろあるかと思いますが、流出入の問題、県内外へというような問題もあるかと思いますが、具体的には、基本的に生徒数がフラットな状態で続いておりますので、ここについては手をつけないでという案で考えたという次第でございます。

多分しかしながら、それはひとつの形で考えた案でございますので、またいろいろな議論をいただきたいと思います。

それで、流出入の関係は、まさしく委員さんがおっしゃられるとおりでございます、これにつきまして、場合によりまして私ども教育委員会の問題かもしれませんが、より近場の学校ということもありまして、第8通学区から流れている。さらには第8通学区の中で選びにくい学校が、第7通学区にあるというようなことによるものかもしれません。

それで、工業高校の関係についてご意見がございました。この辺は、私どもの案の中に、例えばの話が、箕輪工業、赤穂と駒ヶ根工業という話の中で、どうしても対象としているのではないかなというようなご意見でございますが、私どもはそれぞれの学校について、このような個別に細かなお話は、あくまでも検討材料ということでお示ししているということの中で、その点については、あまりご説明をしないほうがというような考えでございますけれども、ある点を申し上げますと、当然工業の分野を残すという予定で、今後の学校というものは考えていきたいという前提でもちろん考えております。

そういう意味では、例えば、今日お示ししました資料2に、「総合選択制の時間割の例」というものがございます。これは、さっき書いてございましたように、今現在蘇南高校におきまして、普通科と商業科と工業科が一緒になった学校でございます。このような連携の学校とか、そういうことの工夫が今後十分できると考えている次第でございます。

飯田長姫と下農についての考え方も、ある意味で、総合学科高校につきましては、極めてバリエーションに富んだものができると思っていますので、それぞれの特色を生かしたいろいろな形での傾向をつくりまして、その上で、特色のある、「魅力のある」学校づくりというようなものができるのではないかと考えている次第でございます。

また、多部制・単位制とか、総合学科高校につきまして、画一的に各地区にというご指摘もございました。ひとつのご意見だと思わうですけれども。ただ、私どもは、例えば塩尻志学館高校に総合学科高校があるのですけれども、塩尻志学館高校には非常に広い地域から生徒さんがお入りになられているということを考えた場合に、ある程度の「魅力ある高校」という視点からすれば、皆さんの通学の利便性を考えて、それぞれの地域に1校ずつ、さらには多部制・単位制についても1校ずつ提示しまして、通学の利便性を含めて、また生徒さんがお集まりやすいような形になることを考えている次第でございます。

また、先ほど財政の関係の資料のご説明をしました。ほかの委員さんからもお話しいたしまして、また川島委員さんにもご指摘いただきましたように、飯田地域で、いわゆる公民館主催の会合というようなものがあつた次第でございまして、確かに、この委員会にお出ししましたような県の財政状況と、それに基づく教育費の推移とか、そういうような資料をお出ししていませんでした。これをいろいろな会の中で、議論が、ひとつには、ややもしますと、はじめに財政ありきではないかという議論に傾く可能性もありましたものですから、あえて大勢集まるその前でお出しをするかどうか悩んだ結果、たまたま私どもの判断としてお出ししなかったわけなのですが、ご指摘いただいたことでもございますし、今後検討してまいりたいと思っています。

それから、先ほど見ていただきました資料の16につきましては、ご指摘いただいたとおり、普通高校の場合の例でございます。それで、こんなことで、先ほどご要請いただきましたものにつきまして、そのことでどの程度のものをお渡しできるかということ、また改革議論をいろいろなほかの委員会においてもご議論いただきましておりますので、資料の調整等を少しさせていただきまして、どの程度のものを出せるのかということと考えますと、十分満足いただけないもので、なるべくとは思いますが、また次回までに準備させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今の事務局のご発言に対しまして、何かご質問がございますでしょうか。

(藤本委員)

ちょっといいでしょうか。

県会の様子が、高校教育課長さんからご説明があつたのですけれども、県会の発言の中で気になることを1点だけ、吉江課長に伺いたいのですけれども、教育長職務代理が、多部制・単位制が設置されない場合は4校を減らしますと言われました。これは、どこで誰が、いつ決まったことなのでしょう。

私は、こういう手法が最も気になるのですが、こういうふうにならぬようにしながらこの委員会を誘導していく。総合学科を設置しなければ、学校を減らしますよと、次に出てくる

のではないか。

「どっちを選ぶんですか。こっちをやめてこっちを選ぶのだったらこうですよ」といった手法で小出しにすることが、私は非常に気になるのです。多部制・単位制の設置がもしできなかった場合は4校を減らすというのは、どこでいつ決まったのか。

（吉江高校教育課長）

恐れ入りますが、第1回目の推進委員会の資料7をご覧いただきたいと思います。第1回推進委員会の資料7に、それぞれの各通学区の学校数を配置した横長の資料があるかと思います。それをご覧いただきたいのですが、ここにございますように、まず、私どもは、先ほど今の委員さんのお話の関係で、職務代理がどういう態度でお答えしたかをまずご報告申し上げたいと思います。

多部制・単位制については、議会でも議論がいろいろ出ております。いいという議論もあるし、また多部制・単位制はどうかというような議論も実際のところ出ておりますし、また具体的に、ある地域におきまして、ぜひ多部制・単位制を設置するべきだというようなご意見もいただいている地域があることも事実でございます。そのような会議の中で、仮に多部制・単位制ができないとなれば、定時制なども含めてどのような形になるのかというようなご質問がありまして、それにつきまして、いわゆる仮にという議論でお答えするようにとお答えしたのが、この資料7でご説明させていただきたいものなのですが、ここにございますように、89校、言ってしまうとトータルで90校。このトータル90校を75校、プラス1で76校にするということは、『最終報告』で、従来から一応目安としていただいた数字でございます。ですから、89校、言いやすい言葉で使いまして、90校を76校にするということまでは、まず委員さん方のご理解をいただいていると思います。

それで私どもは、76校にしたうちの4つを、全日制から定時制に転換する形で、今ある学校をそのまま残したらどうかという案で、ここにございますように、1、1、1、1で4校ということでございます。

ですから、ただこの多部制・単位制が設置されないとすれば、当然のこととして、この76校という、この数字になるということをお答えしたまででございます。

藤本委員がご心配されている総合学科につきましては、今ある全日制が、まるまる全日制としての総合学科に変わりますので、それが仮に設置されなかったからといって、学校数が減るとかそういう議論ではもちろんありません。ただ、多部制・単位制の場合には、私どものほうの考え方が、いわゆる今申し上げましたように、全日制を定時制に転換するという前提で考えておりますから、ここにお示した76校という数字をお答えしたまでということでご理解を願います。

（池上委員長）

よろしゅうございますね。

ほかにございませんか。

それでは、藤本委員のほうから、関連する事項で、将来は次のようになるのだろうと思いますが、そのための資料の提出をいただいておりますので、ご説明いただけますか。

(藤本委員)

どのぐらいの時間がいただけるのでしょうか。

(池上委員長)

そうですね。今から5分ほどいただければと思いますけれど。

(藤本委員)

ちょっと印刷部数が少なかったものですから、行き渡らなかったと思いますけれども、それでは、5分でお願いします。

「総合学科は職業高校に代わり得るのか」という資料をお手元にご提出しました。断っておきますけれど、私は、総合学科を否定するつもりはありません。総合学科はそれなりにいい学校であり全面否定を私はしているわけではございません。ただ、職業高校に変わり得るか、また、総合学科の現状というのやはり知らないといけないのではないかとということで、ここに資料を出しました。

もちろん、総合学科にはいい点が多い、特に『学校教育法』第41条の、高等学校の目的は、普通教育と専門教育を施すんだという点で考えれば、本来的に『学校教育法』第41条にそって実践しているのは、職業高校であり、それから総合学科である。一部の進学高校は、そういう意味では、残念ながら少し問題な気がします。

では、5分ですのでぱっといきますと、総合学科は、普通科でも職業科でもない第3の学科、どういう学科かというのをそこにずっと書いておきました。

特に、「総合学科を創る」(学事出版)の中で、寺脇研氏、文部省の方の講演は、非常に、総合学科の本質についていると思ってそこに載せました。「高校生全員が大学に行けるわけではない。無理矢理、英語や数学などやらせなくたっていいだろう、英語なんて一生使わない生徒だっているじゃないか、好きな教科を、選択し、勉強すれば、意欲が湧いて勉強するんだ」と。

文科省はこういうことをしているかといいますと、中教審にきちんと明記されており、まず各通学区に少なくとも1校ずつ設置して、どの地区からも生徒が入れるように設置しなさいということです。

では、10年たったら総合学科はどうなっているのか、私が全国的な例を少しまとめました。大学進学にシフトしている総合学科と、非常に困難な生徒を抱えている総合学科に分かれております。

それから、最近の総合学科の実状をそこに書いておきました。関東地区の総合学科の研究大会が昨年11月にあったのですけれども、その第3部会での発言をそこに書きました。「生徒、保護者の進学要求に応えられないような総合学科では、学科転換が無意味になってしまう。その際、進学校は、国公立、有名私立である。これらの大学進学者を増やすために、推薦入学に頼ってはだめなんだ」と。

それから、職業系総合学科として最初にできて、全国の総合学科をリードした筑波大学附属坂戸高等学校の第2次学校改革をホームページで見えていただければと思いますけれど、こういう名前が付いております。「多彩な選択科目を開設する総合学科の進学名門校をつくる」と。「現状にとどまっていれば総合学科の衰退は目に見えている。進学にシフ

トせざるを得ない状況になっている」。

それから、実際の専門科目ですけれども、これは、県内の工業高校と、ある総合学科の機械系の教育課程です。

3 ページにいきます。

これから見てわかるように、仮に総合学科ですべての専門科目を履修すれば、専門科目としてはそう遜色のない科目が選択できる条件だけがあります。では、現実はどうかという、現実にはなかなか1年次、2年次で科目を選択しなければ、2年次、3年次で選択できない科目があり、さらに開講されない科目もあるという問題がある。現実の生徒の履修単位数を見ましたけれど、だいたい専門科目の単位数は10単位ということで、専門性の授業は職業高校の3分の1以下です。それしか履修しておりません。

系統性が崩れる。これは志学館高校の例ですが、商業教育についてそこに書いてあります。きちんとした商業教育を受けないのにもかかわらずマーケティング等を選択する場合があります、そういう系統性が崩れた科目選択になっている。

それから、次に、生徒が生き生きと主体的に学習しているのかということ、必ずしもそうはいっていないのではないかと。将来的な職業選択を視野に入れてということなのですから、必ずしもそうはなっていないのではないかと、そういうことをそこに書いておきました。1年次から選択が入っていて、1年次に選択しないと2年次、3年次に選択できない科目がある。さらに2年次の教科書を1年次の7月に決めるわけです。志学館高校の先生は、「職業選択はできるだけ早いほうがいい、そうしないと進路が決まらない」と。

科目選択の液状化、すなわち科目選択であまり迷われては困るということで、現実には全国では、コース制というようなモデルをつくって選択させているところもあります。

それから、選択制ですので、履修の自由ということは、放棄することも自由ですので、なかなか大変なようです。好きな科目だけを勉強して、本当に、21世紀を生きる日本人としての共通教養が身に付くか考えなくてはならないと思います。

それから、放棄の自由があるので、例えば、坂戸高校にはこんな内規があります。「主体的に学習する意欲のない生徒には、徹底的に厳しくし当然であり、中退もやむを得ない」。5分遅れたらもう欠課です。

それから、多忙化の上に成り立っている。先生方の持ち時間が、18時間から19時間、これは志学館高校も同じです。非常に講師の先生が多い。

はい、最後のページへいきます。

だから、私は、総合学科というのはどうもこんな結論に至るのではないかと。とりあえずは勉強して、進路を考え、上級学校につながる専門性の入り口だけは勉強する。だから、専門の知識は上級学校に委ねざるを得ない。そういう意味で、やはり大学進学にシフトせざるを得ないのではないかと。

職業高校も現在はコース制、選択制等があり、ある意味では、総合学科化しております。専門科目も、そんなに深化していない。各科共通履修科目が増えております。

職業高校から転科した場合の総合学科の課題なんですけれども、まずは職員が17パーセント減、実習担当者が大幅に減る。それから、もうひとつ、全国で起きている大きな問題点は、職業系の系列を生徒が選ばなくなるということなんです。それは、作業や農作業、実習やレポートを嫌うから、どうしても普通系の系列に行ってしまうのです。

そこで、ある全国の総合学科では、こういう予測できない入学者により、専門教育を受ける生徒が減少しないように、白紙で生徒を募集しないで、系列ごとに推薦枠を決めて、1年から基礎的な専門科目を履修させるという総合学科も出ており、もう理想が揺らいでいるのですね。

最後です。総合学科は、私は100パーセントは否定しません。いい点があるわけです。地域の農業、産業、経済と地域の職業高校の共生関係を、ぜひチェックしてもらいたい。

職業高校は、公的職業機関として、それに代わりえるものはないわけです。結論が4ページの下に書いてありますけれども、職業高校から総合学科への転換は、やはり地域とお互いに専門性を共生し合い、共存関係にあるという職業高校については慎重にすべきであり、ぜひ地域の声を聞いて欲しい。

とは言っても、総合学科にはいい面はあるので、ぜひ議論をしていただきたい。

時間が5分を少しオーバーして、申し訳ありませんでした。

(池上委員長)

中途退学者、よろしゅうございますか。

(藤本委員)

総合学科について、文部科学省のホームページから全国の資料を取り寄せてみました。

先に、総合学科は、非常によくなっているかなと私も認識しておりました。

これは、平成16年度の退学者ですが、2ページの上ですが、総合学科と職業高校の退学者は、そんなに変わっておりませんので、総合学科もだいぶ変わってきたなという感じがしているわけです。

3ページにいけますと、平成12年度のデータ、それから5ページにいけますと、平成13年度のデータがあります。これを見ても、この当時、文科省初等中等局の「児童・生徒の問題行動に関する調査研究協力者会議」のデータですけれども、やはり大幅に、退学者が多い。その理由はそこに書いてあるのですけれども、やはり気になるのは、人間関係がうまく保てないという。

やはり単位制のためかなと。そうはいっても、授業に興味がないというのは少ないわけで、やはり総合学科のいいところかなと。平成12年度、平成13年度の総合学科は、かなり中退者を抱えていたのですが、全体的に、最近は改善されていると思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ここで、おおむね前半の議論を終了いたしたいと思うのですが、先ほど熊谷委員から話がございました部会についての問題です。これは先ほどから、発言がございまして、全体的ないわゆる「高校の魅力」というところにまず収れんをしていただいて、その中でどうするんだという世界が生じた場合には、そういうことによるかもしれないという範囲にして、先に、99%実を結ぶという方向に伸ばしていきたいと思うのですが、いかがですか。

(熊谷委員)

ただこの議論がいいか悪いかは別にして、お願いという方向付けをしたいということもあるようでございますので、部会の設置等をするというのであれば、当然部会の人選なりいろいろあるとして、各部会を1回や2回や3回開くということになると、そういう時間もかかることだと思いますので、できれば、今度20日くらいに、たたき台なりをご提出いただいて議論させていただいて進めていただかないと、結局、部会を待っていても問題があると思うのですけれども、同時並行的にやっていただかないと時間的にほとんどない気がしますので、次回の20日くらいに部会に関する考え方を、聞かせていただきたいと思います。

(池上委員長)

そうですね。まだ、いわゆる「魅力づくり」のほうで、今度進行しませんから、各処理がそういうご提案になっているわけですが、そこを進めた上で、その議論はと思っているのですが。

今藤本委員のほうからご提案、ご意見がございましたように、職業科の問題が、あったわけですが、そういう議論をさせていただいて、その上でというように考えておりますので、部会というのは、あまたの声を聞くという世界です。それなりに何かでやっていかなければいけない。自然発生的にも、もちろん出るでしょうけれども、そのように考えておりますので、もう少しずらしていかないかというように思います。

いかがですか。

(熊谷委員)

私の地域の事情で言えば、やはり委員会に、地域がこれを反映させたいという気持ちなり意見が非常にありまして、教委も地域の声を、進んで聞きますよという姿勢を持っているわけでありまして、この委員会に地域の声を反映させるために、委員会が地域へ出向いて、部会という場で意見を聞くということでもいいと思いますので、ぜひこの場へ地域の声を反映するというこのような視点で、ぜひ部会の設置をお願いしたいと思います。

特に、この前に私が言いましたように、委員の方が少ないという思いがありまして、私のほうは盛んにそういった地域の声を反映させて欲しいという意見がきていますので、先ほど言いましたけれども、私一人で反映するのが耐えられないのがあるものですから、ぜひそういった場面で意見を反映するというような議論がほしいなと思います。

(北原曜委員)

私の資料は、前回のことに對して、部会設置案についての意見を申し上げたいと思います。

資料の1ページ目でございます。

部会設置案の、今、熊谷さんからお話がありましたが、これを早く打ち上げますと、やはり地域のエゴといいますか、セクショナリズムが強まってしまうのではないかとこのことを大変危惧(きぐ)します。

やはり、全体的な、今、職業科の問題が出ましたし、普通科も少し進学しない学校の問

題が今は大変あると思うのです。そのような全体の議論を進めていく中で、後段にやっていったらいいのではないかと思います。

それで、最初に、地域のそういうものが出てしまいますと、どうしても後ろ向きになってしまうのではないかと思います。防衛的な。そういうことは、今回は、避けていいのではないかと思います。それは、そのほか、県で保護者の意見は非常に重要なことなのですけれども、今は、第3通学区の全体で考えなくてはいいけませんから、また後でということのほうがいいかと思うんです。

（藤本委員）

最初から県立高校という高校は、多分20校もないのではないですか。私はデータは持っていないですけれども。県立高校89校のうち、最初から県立高校だったのは20校もないわけで、ほとんどの県立高校は、地域が、土地を提供し、労力を出して、つくり上げてきた地域の財産なんです。

だから、私は、その地域の声を聞くということは当然の話です。このあいだ、私も飯田のフォーラムに行きましたけれども、「僕たちの地域の学校だ」という声や、伊那北高校の生徒会長さんの、「僕たちの意見を反映させてほしい」、それから、飯田工業高校の定時制の生徒さんは、「僕たちが知らないうちに決まってしまうのはおかしい」と言っておりましたが、私はやはり、ぜひ部会を設置していただいて、教育における住民自治を確立していただきたい。

何かエゴになるとか、そういうことを危惧するばかりではいけないと思います。そういう議論の積み重ねが必要で、この推進委員会だけの議論ではいかなものかだと思います。

県教委に伺いますがメンバーは県教委さんが決めるでしょうか、どのくらいの期間がかかるか分かりませんが、私はやはり、生徒の声を聞く、当事者の声を聞くという姿勢を、ぜひ大事にしてもらって、部会設置をぜひお願いしたいと思います。

（池上委員長）

声を聞くことが部会の設置ありきではないであろうと、私は思っていますから、声を聞くことは、また十分に事務局と相談させていただいて、そういうステージを設けるとして、先に、やはり「魅力ある学校」の議論というのが先行して、次にそういう先に進んでいきたいと考えておりますので、そのご意見を、よく学校からも承知していますので、それを無視することは絶対にはないと思いますから、そういうような対話をしていきたいと思いますが、その予定でよろしいでしょうか。

それでは、そんなことでやらせていただきます。

では、今から10分間、11時10分に再開いたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので再開をいたしたいと思います。

それでは、いよいよ「魅力ある」の議論に行きたいと思います。

魅力ということでは、一委員として私も大いに疑問を持っているのですが、地域校の問題だと思います。都市部の学校は、これからご議論をいただいて、選択肢がたくさんあると思いますが、地域校の場合には、ややそういうことの議論が難しいのではないかと思います。

理由は、なかなか大変なところであると思いますが、地域校の在り方について「魅力ある」という世代に、ぜひご意見をご研究いただきたいというように思いますが。いかがでございましょうか。

熊谷委員、いかがですかね。これは相当、阿智、阿南という下伊那にはそういう学校がございしますが。いかがなものでしょうか。

(熊谷委員)

地域校、阿智、阿南では、それなりに苦労しているのであろうと思っていますが、良いか悪いかは別として、私の目から見たら、やはり従前は、言ってみれば地域にあるということについて、後ろ向きの雰囲気だけとっておりますけれど、ここにきて、やはり学校のあり方がやはり地域校をどうしていくかという思いが、その学校自体に生まれてきているのではないかという感じに見させていただいています。

ただ、それは本当に完成といえますか、情報発信をしているというところまではきていないと思っていますけれども、地域校として、考えていくというのは、学校自体が今まで、周辺が地域交通網を整えなければいけないというので、行政の皆さんが、突き詰めたということがあるのですけれど、学校の生徒、教員自体が、そういう手法を考えて情報発信し始めたかなという気がして、そういう意味で、今日はお見えになっていませんけれども、阿智の村長さんあたりも、とにかく地域校が、これから地域の子どもが通えるような高校になっていくにはどうするかというのがなっているのですけれども。

そういう意味で、私は阿智、阿南とか、地域でこの皆さんだけで情報発信がまだまだではないかとおもいます。

(池上委員長)

確か、阿智、阿南は、現在普通科ですね。これから、魅力について検討を行います、内容の別に検討が行われて、方向が変わるかもしれない。そういうことで、特に危惧をしていますか。

(藤本委員)

地域高校ですけれども、阿智、阿南の例が出ましたが、地域高校は一番努力して、非常に実績をあげている。特に、今日ご欠席の岡庭委員さんは、教職員と一緒に他校の学校視察に行って、阿智高校にコース制をつくったり、行政も、先生方と一緒に、地域高校、阿智高のコース制などを検討、非常に活気ある学校になっているなど感じているわけです。

地域校は、多少くどくなってしまうかもしれませんが、歴史的に見てみれば、地域の住民が土地を提供し、それから財政的な負担をして、そして総合制高校として地域の本当の学校として生まれてきたわけです。だから、普通科と、それから家政科と農業科が、多分地域校にはあったと思うんですが、そういう総合制の高校として地域高校は、住民の方々がつくって、誕生してきたという歴史的な背景があるわけです。

先程部会設置のところで、地域の方の声を聞いてと言ったわけなんです。けれども、県立に移管されていく中で、普通高校になっていく。普通高校になっていくという過程でこういう現象が起きたかということ、通学区が拡大されていく中で、今まで地域の住民が育てて、総合制ということであった地域高校が、1つの通学区の中の1普通高校として、さらに周辺の高校、第3、第4の高校として位置付けられる中で、地域高校の地盤沈下が起こってしまった。

さらに、迷惑的な、状況にまでなってしまった。そこで、一番初めに、何としても生まれ変わろうとして努力したのが、地域高校ではないか。この通学区では、高遠、それから阿智、阿南というところは、先ほど言いましたように、岡庭委員さんのように行政が一緒になって、しかも行政が、私に言わせれば、県教委が怠慢だと思うのですが、かなりの財政負担をしている。

さらに、「魅力ある」中においても、かなり地域が現に財政負担をやりながら、そして財政負担ばかりでなく人も派遣して、阿智には情報など、3つのコース制ができています。

だから、現時点で、地域高校の「魅力づくり」というのは、非常に先行して成果を上げている。私は、見守っていかなければいけない、その実践は非常に学ぶべきことが多いのではと思っています。

現に授業も、地域を教材化したり、地域という教科をつくったり、地域との交流を授業の中に入れたり、それから基礎学力アップ、大学進学と非常な努力をしているということ、ぜひ地域校に学んでいただきたいなと思いお話ししました。

(小坂委員)

今、高遠高校の話が出ましたので、きのうも高遠、長谷両首長さんと話をしました。地域高校、高遠高校は、藩校の進徳館の歴史を組み80周年の歴史があるんです。ですから、最近できた地域高校とは、やはり少し違うと思うのです。そういう意味で長い歴史を持っているわけですが、そうした中で、やはりいろいろな問題に突き当たって、一時期は、上伊那地域の中心部からあぶれた生徒が行って問題を起こしたという、何のための高校かと、地元の人たちは大変怒ったという時期もあったわけですが、やはり、今藤本委員さんが言われたように、何とかして高遠、長谷を合わせても10,000人しか人口がないわけです。その中で地域高校を守っていくというのは、これはもう非常に難しいことです。そういった中でいろいろな試みをやっている。

ここにもございますけれども、進学以外に、福祉、あるいは英数学科を設けるというような努力もしている。しかも、例えば、これは、私は地方自治の上で問題があるかと思うのですが、今でも市町村で補助金を出しているのです。きのうお聞きしましたら、高遠、長谷では振興会という名目で、毎年100万円ずつ出している。こういう事情もございます。

そうした中で、一番問題になっているのは、今もお話した私立。名前を申し上げますけれども女子校がありますけれども、先生もバスを運転して、生徒の送り迎えをやっているんです。そこまで私学は努力をしているわけです。先生がバスの運転手などということは、藤本さん、どうですか。送迎をするなどということは、とても考えられないでしょう。私学はそういう努力までやって、佐久長聖高校だってそうですね。私が佐久にいたころは本当に問題校だったけれども、今は素晴らしい高校になって、全県区から生徒が来ていると。

そういうことを考えますと、今、市町村合併が盛んに行われておりますけれども、これからはやはり地域間競争だと思うんです。市町村も、ほかの町村にいかにして勝つかという競争になってくると思うのです。ですから、私も、やはり県立高校もそうした面の努力をしていかないとこれから成り立っていかないのではないかなというように思っているわけです。

ですから、私立ではこのように言う人もいました。「そんなことは5年間やって、下のほうから切っていけばいいじゃない。希望校が少ないところから、切っていけば一番それがいいんじゃないの」という極論を言う人さえいるわけです。

ですから、地域高校というのは、そういう地域の皆さんが、本当に財政的な支援等やって、いろんな工夫をやっている。また、先生方も、例えば進学校の先生方より地域高校の先生方のほうが、私はそういう意味では、努力をしていると思います。その努力が認められているのは、残念ながら非常に少ないということですが、やはりそういった面で、そういった地域を巻き込んだ方法、何と申しますか、そういったわが町の高校というような形の中で育てていかなければいけないのかなと思っておりますけれども。

（小林委員）

地域高校というのは、私は2種類あると思うのです。いわゆるここをもし廃止されたら、本当に下宿でもしなければいけない地域です。いわゆる過疎地を抱えているようなところの地域高校と、1町村1校の学校です。そういうものも、ある意味では地域高校だと思います。例えば私のいる辰野高校も、箕輪工業も、町で1校だけです。ですから、ある意味では地域高校だと思うんです。これはまだほかにあると思うのですが。

それで、私は、これを朝、全部読ませていただきましたけれど、一番のポイントは、本当に地域に密着して、地域がその学校にいろいろなことを求めている状況ができているか。そこが一番のポイントだと思います。地域にあるから、地域でがんばっているからとかは、それはいいんですけれども、具体的にそういうものがあるかどうか。そこで、「魅力ある学校づくり」をしているかどうかのポイントになると思います。

例えば、先程小坂市長さんがおっしゃった高遠高校で言うと、本校の生徒のボランティアなしには行えない高齢者施設が幾つもできていて、この高校生切実に求めていると。これは本当に地域と結び付いている学校だと思うんです。

それから私のいる辰野高校では、3者協議会、辰高フォーラムというのがずっと先からできていまして、これは、今、全国各地から視察に来ていますけれど。学校の先生と生徒、保護者、それから地域と住民が定期的に話し合って、いろいろ解決すべきことをどんどん要求をするんです。それについて、よく練って、実際に実施する努力をしているのです。

その中で、例えば、フリーマーケットなんかを辰高でやられたら、商工会が、大変沈滞した町を活気づけてくれたというようなことや、それから地域でのいろいろな文化祭へ高校生が出かけてくる。それから、私が教育長をやっているわけですが、生涯学習のいろいろな行事にも、だんだんいろんな形で参加するようになってきている。

正直に言うと、さっきも言ったように、辰野中学が諏訪へ流れたものが何で上伊那に戻ってきたかというそのひとつは、辰野高校が、本当に地域に信頼される学校になってきたせいです。ですから、ずっと数年前に比べると、辰野中学から辰野高校へ行く生徒がとも増えてきています。

そういうことだと思うんです。「魅力ある学校づくり」というのは、いろいろなコース制など、それはいいんですけども、まず地域が本当に信頼していく取り組みをどのようにやっているかということだと思うんです。

それから、お隣の箕輪工業については、少し地域とのつながりとは別の観点でお話をさせていただきたいのですが、私が教育長をやる前に、学校不適應の巡回相談をやっていまして、高校もかなり回らせていただいていたので、そんな点で1つ理解できたのは、箕輪工業の場合は、あそこは工業科の定時制があります。私が非常に驚いたのは、全日制の先生はそうですが、必ず1回は定時制を経験する。校内にあって、必ずする。

定時制の子どもたちは、どこの学校もそうですが、中学時代いわゆる学校不適應だった子どもが多かったのですが、先生方の努力で、ほとんどが復歸していることが現状になっている。問題は、そういう子どもたちと接して生徒指導の在り方を学んだ先生が、また普通科に戻る。これは非常に、私はいいシステムだなと。教育課程を変えることも大事ですが、こういう中で、今、高校生の非行の問題は大変です。学校でどういう手だてをやっていくかということも、「魅力ある学校づくり」のひとつだなというように思います。

以上です。

(小池委員)

「魅力ある学校づくり」ということで重要なことは、高校へ進学した子どもたち自身が、学んで、しかも自分が分かって、乗り越えていく行程(プロセス)に今、自分は居るんだという実感が持てる部分が大切ではないかなと思っています。

例えば中学校でも1マイナス2分の1はできるけれども、1マイナス3分の2になるとできなくなる子がいますが、そういう子も行きたい高校へ行くということがあるわけです。

また、F高校あたりは、昔からのF農学校というその歴史があって、地域の人に支えられている。そして、高校には高校のカリキュラムがありますが、コース制や習熟度別学習のようなものを取り入れながら、また農業科や園芸科の関係で、実習的なものを多く、とり入れながら学ばせていくという、その高校独自の教育というものがあるわけです。学習姿勢というものを培っていく、深まっていく子ども自身の自覚というものを、どう構築できるカリキュラムを構築していくか。そのことを、全高校の議論からやることが必要で、地域高校ばかりにこだわらずに、議論していくのが大事なことはないかと思います。

選択制などをやるわけですが、そういう個のニーズに合わせたカリキュラムを大事にしていく。そのことが一番特色ある高校づくりの根っこになければならない部分ではないかなと、私は思っています。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかは、いかがでございますか。

切り口が、今の小池委員の話ですと、地域校ということがあるんですけど、全体の「魅力ある」ということで、それも含めて、どのように考えていったらよいか。

関委員、いかがですか。

(関 委員)

地域に限ってということですか。もっと広げてという意味ですか。

(池上委員長)

はい。

(関 委員)

やはり一番は「魅力ある高校づくり」ということで、生徒や地域に限らず、保護者が、その学校に何を求めているかで、その求めているものに対して学校側が応えるような教育を施していくかということにあるんだと思います。地域高校の、今の魅力ということでは、伊那の委員さんのおっしゃるそのとおりだと思います。それぞれの地域で、一生懸命努力し、また地域から信頼されるという存在になっているんだと思います。

一方、都市部の高校で言えば、それぞれの生徒が、例えば進学なら進学で、4年生の大学へ希望している子どもたちに、どれだけその学力をつけてやれるか。あるいは、商業科だったら、就職するためにそれだけの基礎的な知識を授けてやれるか、そういったことから、どの程度要望を満たしているかというところにあるんだと思います。

それぞれの生徒たちが目指しているもの、希望しているものが違いますので、なかなか一概にこういう「これ」ということが言えないと思います。

(北原曜委員)

地域高校の定義から少し食い違っているようなところもあるので、地域高校といった場合に、都市部から流れた高校ということで、具体的には、富士見、高遠、阿智、阿南ぐらいいかなと思いますが、その4校に関して言えば、非常に地元も努力をしているようですし、高校自体もすごく努力をしているということで、特に大きな問題はないのではないかと思います。

ただ、前回のこの推進委員会で輪切りと申しましたが、都市部の高校に入れなかった都市の出身の高校生が入ってくる。それによって、かつて荒廃したという面があるかと思います。その辺をどう解決していくかということが、これからの地域高校の在り方も含めて、考えていかなければいけないのではないかと思います。

(池上委員長)

ありがとうございます。

この高校案内を拝見していますと、今委員のおっしゃった内容が、実際はこういうプレスがおいでになるので聞いていることなのですが、そういうところがあるのではないかと、それをどうするかというところだと、私は、本当は思っています。

小口委員、いかがですか。このいわゆる地域高に関することで。

(小口委員)

確か第1回目のときに少し話をしましたけれども、諏訪地域は非常に製造業が多くて、第2次産業40数%、県下では断トツに多いわけです。その中で、今製造業者はこの地域が今後も継続してものづくり地域であり続けることができるかどうかという、非常に危機感を持っておりまして、そんな中で、例えば、小中学校に対して、ものづくり教育に各企業が出向いて行く事などをやっています。また、国際的に見たときにもっと日本の子供には積極性や協調性をもって欲しいなど、高校生あるいはこれから就職する子どもたちがどう育て欲しいかということはある程度まとめまして、それで企業も、とにかくそういうことを意思表示していかないと、将来を考えたときに困ると思っています。

また、企業を将来支えてくれる子供を育てる為には、「いい先生」が必要です。もし、その先生がいなければ企業としていい先生を呼んで来る。あるいは、企業として、人材を支援するということはできます。例えばある企業は、いろんなことを研究されている研究者なども高校へ教えに派遣していますし、そういう「いい先生」を呼んでくるためにはインセンティブを出しても良いと思っています。

そういうことを考えたときに、やはり地域高校も、本当に先生たちが努力をしているのは分かるのだけれども、例えば、県の予算が無くなったときに、「よし、自分たち支援してでもこの高校に残って欲しい」と思うだけの高校であるかどうかということが大事なんです。ただ単に、残ってほしい、ほしいと言っても、その担保を、では本当に残ってほしいと言っている人がどのぐらいいて、地域として何が出来るのかということだと思うのです。

もしそういうことがなかった場合に、これは町営だとか村営だとは分かりませんが、そのようにして県立では無くしていく必要がある。あるいは、地域校の在り方を生涯学級として位置づける。要するに、ある程度、学力に幅がある中で、底辺の人たちが集まっているだけでは困る。そうなったときに、地域高校というのは、そのときに、こういう人たちは「もう来てもらわなくていいんだ」と言うことは必要である。だけれど、そういう人たちが、また学習意欲を持った時に受け入れられるという位置付けに、段階的に変えていくというのが望ましいのではないかと。そのようにしていったら、本当に地域とともに一体となっていくというのがコース制としてできるのだったら、これはもう地域高校としてのある意味で価値はあるのでしょけれども、それが無いけれど、歴史があるから残したいというのは、少し考える必要があるのではないかなと私は思うのですけれども。少し極端な意見かもしれませんが。

(池上委員長)

ありがとうございました。

川島委員、お時間のようですけれども、ご意見がございませんか。

(川島委員)

自分自身が地域高校の実情というのをあまり知らないものですから、あまり出身の方々とは、そんなに深い意見を持ち合わせないのですが、親の立場からしまして、やはり子どもを行かせたい学校というのは、最低限落ち着いた学校、荒れていない学校ということだと思うのです。一時期の、大変な時期というのはございましたので、現在は詳しいデータがないので調べてないので分からないのですが、少なくとも保護者の立場とすれば、落ち着いた環境がいい。それが最低限なので、そのためにどういう努力をしていただくというのかといったところを、注意していただくといういい機会だというように思っております。

(池上委員長)

丸茂委員、いかがですか。この、いわゆる地域校という観念をどう考えていますか。

(丸茂委員)

私の2人の子どもは諏訪市の高校に通っております。親としては、茅野高では近過ぎる、電車に乗って通って見聞を広めて欲しいというつもりで、「電車に乗って通う学校」へ行かせたわけです。

茅野高校の実態といたしましては、48パーセントが茅野市に在住している子どもが通っています。そのほかはどこから来ているかというと、諏訪市の中で茅野市に近い中学校の子どもたちが28パーセント在籍しています。「地域の子どもの多く通う」という点で地域校の役割を果たしていると思います。

茅野高校は確かに「荒れている」学校でしたが、今、独自の改革によって、ここ2、3年を辛抱して、生徒の質を高めようとしています。それは、偏差値的に低い子どもたちの受け皿という高校であっては、入学希望者が減る一方であるから、努力をしなくては入れない学校であるという位置付けにしていこうという学校側の動きです。私も、それはがんばってほしいことであると思っています。

子どもの居場所というものを、高校に求めるというのがあるとすれば、その居場所づくりということが大切なことだと思うのですけれども、ただ居ればいいという高校では、私は必要がないと思います。その高校から、地域社会に貢献できるような人材が巣立つようにということを地域高校には特に求められていると思います。もちろんこの学校にもそれはあてはまることでもあるのですけれども。

確かに、制服のある高校の生徒の中には、何でこんな格好をして学校へ行っているのだろう、もう少しきちんとした身なりで学校に行けばいいのにと、それから昼の日中から学校を出て行って、どこに遊びに行くのだろうという生徒を見かけることがあります。

そういう子どもたちを少しずつでも減らしていこうという取り組みも、茅野高校では行われています。本来子どもの居場所というものは家庭にあるべきなのです。子どもたちに社会のルールを教えるところは学校であっても、モラルやマナーのことまでも学校に任せ

てしまうというその考え方というのは、教育もしつけも学校に任せているという部分が、私はまず根本的にいけないのではないかと、親の改革というものが一番大事なのではないかということを変感しています。

高校改革プラン検討委員会の最終報告書を読んだり、この委員会に出席するたびに、親世代として私たちはいったい何をしてきたのだらうと恥じ入っております。

(池上委員長)

お気持ちはよく分かります。

少し委員長の席は外していただいて発言いたしますが、実は、小口委員が帰属なさっております組織に経営者協会というものがあまして、そこから我々も出ています。

子どもたちの教育という問題についての議論が、ずいぶん行われておりまして、さすればこうするかということに相成った場合に、確かに先生の問題のみではない、むしろ先生の問題よりは、親の問題だということが、そんなような課題でございまして、確かに今の時代には警鐘に値する問題だと。総論的な議論ではなくて、そういう議論が本当に大事なんだなというように、本当は私も思います。丸茂委員のご意見に賛成でございます。

ここで、少し時間をいただいて、事務局で、地域の学校というものについて、いわゆる交通事情とか地域性などのように考えているのかというご発言がございまして、こういうような、いわゆるたたき台が出たわけでございます。このところのご説明を、もう少し詳細にいただきたいと思いますが、いかがでございますか。

(吉江高校教育課長)

いわゆる地域高校につきましては、いろいろご意見をいただきまして、誠にありがとうございます。

こちらの地域は、後先になって誠に申し訳ないのですが、地域高校につきましては定義のようなもので申し上げますと、先ほど来、いろいろとご意見をいただいているとおりなのですが、地理的環境や交通などの理由で中等教育が受けられない地域の人々が、子弟の教育のために熱い願いを持ちまして、例えば市町村や、あるいは学校組合立ということで、当初設立したというような歴史を持っているということの学校でございます。それが当然ながら県立高校に移管されたということで、地域との深い結びつきがある学校というようなことを一般的には申し上げます。

しかしながら、地域高校の、例えば学校名で申し上げますと、この地域の場合でいきますと、富士見高校、箕輪工業高校、高遠高校、阿智高校、阿南高校、これがそれぞれ地域高校という位置付けになるのですが、先ほど来ご議論いただいておりますように、現在、交通の便が果たしていいのかどうかというようなものは、いろいろなご議論があります。

例えばの話が、地域高校の中には、軽井沢高校も地域高校として位置付けられています。そんなことで、軽井沢が地形の利便性がいいか悪いかはさておきまして、そういうような状態でございますので、その辺につきましては、時代の流れの中で、かなり位置付けが変わっているものでございます。

また、地域高校につきましては、各市町村につきましてはのかかわりの違いというような

ものも現実的にございます。先ほど小坂委員さんからお話しいただきましたように、非常に地域との連携、あるいは地域が大事にしている学校もあれば、必ずしもそうではないというところも、実際問題としてはあろうかと思えます。

そんな議論の中で、私どもがまず考えましたのは、これは全県的な議論なのですから、地域高校が地域高校であるから残すとかというような議論ではなくて、基本的に、まずは交通の利便性、それとそれぞれの地域の、今、申し上げたような学校に、それぞれの地域から集まる生徒さんの状況などを考えた場合に、まずもってこういうようなところの学校は、今後の生徒さんの交通の事情、通学の事情等を考えた場合に、十分今後に残していかざるを得ないのではないかと。むしろ、残していくべきであるというような位置付けの中で考えた上で、今回の候補案というようなものをお示した次第でございます。

なお、確かにそれぞれの学校にいろいろな特徴がありまして、また関係者がいろいろな努力をされていることにつきましては、先ほど来、委員さん方がおっしゃられているとおりでございます。本当に、そういう意味では、かなり活発な活動をされている学校もありますし、また学校によりましては地域と学校の間に、映画とかというようなもののひとつの題材のなった学校もあるというようなことも、合わせて検討いただきたい思います。

以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

では、議論に戻りたいと思います。いかがでございますか。

藤本委員、いかがですか。その地域高校の件に関して。

(藤本委員)

先ほどちょっと、地域高校の歴史と実態をお話させていただきました。

私は、議論の進め方として、若干気になっておりますのは、前回もお話ししましたけれども、各地域高校は非常に「魅力づくり」について努力しているのですが、前回の発言とまた少し重なってしまうのですが、「魅力づくり」競争というかサバイバル・ゲームでしょうか。ある地域の先生からこういうことを伺いました。3 地区の校長先生が、中学校の先生方や生徒を集めて、プレゼンテーション競争で学校のアピールをした」と。

私がとても気になるのは、新自由主義教育などと言われておりますけれども、デパートのバーゲンセールではないが、人気のない、売れない商品はなくなってもいいと、そのような魅力づくり競争を、心配しておりまして、通学区の拡大がそれに輪をかけるのではないかと。

私は、「魅力」というのは、さきほど辰野高校の実践が報告されましたけれど、ぜひ、生徒と一緒に、地域・生徒とともに学校側がつくっていくというのが基本であって、私は、それがなくてはならないのではないかと。そういう意味で、私は、地域高校は非常に一生懸命行っている。

私は、この議論の中で、もう少し上にあるハードの面での議論というほうにも、議論していかねばいけなかなと。総合学科などいろいろと出ているけれども、そのほうの議論も少ししていかねばいけなかなということも若干気になっております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

同じように、北原委員、いかがですか。

(北原秀樹委員)

地域高校については、私も高遠出身ですので、いろんな努力をしてああいうコース制を敷いて、「魅力づくり」をしているということは分かっております。どうも地域でもそういうことをやっているということをしているのではないかなと思います。

高校によって、コース制だとか、それで1点に魅力をつくる、また、部活動に力を入れる魅力をつくるなど、いろんな面があるかと思うのですが、やはり生徒にとって一番というのは何かと考えてみると、分かる授業とか、補習授業ということをやってくれる先生がいるというのが一番ではないかなと思います。

先ほど小口委員が言いましたが、いい先生を連れてくるというような話もありましたが、コースがあるから楽しいというかとも思いますが、やはり分かる授業をしてくれるとか、親身になって話を聞いてくれるという、先生方の人間的な面ということもかなり大きな影響があるかと思っています。

ただ、転勤等いろいろありますので、ずっといるわけにはいかないのですが、そういう面で、中学のほうもそうですが、やはり分かる授業をしていかなければ、やはりこの先生は、ということになりますので、そういう面も含めて「魅力づくり」ということを考えて、少し難しいところだと思いますが、そういうことも考えるべきはないかなと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにご意見がございますか。

(小口委員)

先ほどもちょっと言いましたが、私は、できれば、地域ごとに、「どういう地域にはどういう高校が必要だ」というようなアプローチ。今まで、どういう学校がどういようにあるから、それをどういようにするかというよりも、「この地域にどういよう学校が欲しいんだ」ということの中から、それが本当に必要なのかどうかという方向付けをできればと思います。やはり学校というのは社会と結び付いてこそ学校だ、社会のために、だからそういう子どもたちはどのようにはぐくまれていかなばならないか、ということが必要だと思ふのです。

そういうアプローチをしながら、例えば、高遠には必要だとか、富士見には必要だといういようことが議論されたほうが、今までここがあったから、それをやめるかやめないかといういようことよりも、どういよう地域にしたいからどういようことが必要だといういようアプローチをすると、例えば、そのためには、では何をしようという方向になってくるので、そんなアプローチしたらいいのではないかなと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは行政として、小坂委員いかがですか。今のお話の中で、そのニーズの問題、ニーズという世界から考えて、その点については何か話でございましょうかね。

(小坂委員)

高校教育も、今はほとんど必須のものになって、ほぼ義務教育化したわけです。そういう形の中で、やはり社会が求めている、例えば高校だけ出てきた、私どもも高校を出た生徒を、企業、などへ配置する。そんな中で、一番肝心なのは、ある私立の女子校の例を挙げますと、池上さんらも十分承知しておりますけれども、一番企業が必要としているのは、礼儀正しく、そしていわゆる荒れていない学校です。そして、思いやりがあって、きちんとした対応ができる。それを一番求めているというのです。企業の皆さんに聞くと。

だから、学力なんか大して問題ではないという、そうした根本的・基本的なことが高校で行われているかどうかということが、一番必要なことだということをお聞きしたんです。これは、特に池上さんも会社の専務ということですから、そのようにきっとお感じになっていると思いますけれども、そうしたいいわゆる一般的な社会常識ということ、きちんと習得しているかどうかということがひとつ、大きな高校の評価につながるということが私は分かったと思っていますけれども。

池上委員長、いかがですか。

(池上委員長)

先ほどちょっと申し上げたのですが、私見を申し上げさせてもらいます。

私見と申し上げても、経営者協会がどのような判断をしたかということでございますが、確かに、1点目は、やはり社会人としてまっとうに通用する子どもたちであることということが一番必要であります。それは、しかし現下の状態がそうであったのか、と私は思っています。

今後は、そういうところからさらに話が発展すれば、やはり世界に通用する人たちがかなり多く中におられる学校でなければいけないという世代が、それが一番大事なことだというように考えておりまして、その教育の原点は、一番先の、第1点目のところは、これは、親御さんの教育姿勢に実にかかっていると私は思っております。

第2点目は、それはやはり、ご専門の学校の先生に、それなりに通用する、言い過ぎがないようにするとすれば、それなりに頑張っていて、世界に通用する子どもたちを養成していただきたいというのが第2点目であります。これがないと、明日の日本もなかなか難しいところに来たのではないかとこのように認識をしております。

そういうことでご報告いたします。

(小林委員)

地域高校が、今話の中心になっているのですが、もう少し広げた話ではないですが、「魅力ある学校づくり」というのが、今までずっと話が続いているわけですが、地域高校の話から、ひとつの視点としては、地域と本当に密着できているかということがひとつあると

思うのですが。

私は、あとどんな視点が「魅力ある学校づくり」になるかということ、やはりひとつは学力です。学力というのは、長野県独特の国公立の進学が、現状は非常に劣っているという。それが、さっきの諏訪は県外に流れていくひとつの問題でもあるわけですが。それと、もっと一般の生徒が意欲を持てる学科という意味も含めた、その学力アップをどのようにしていくかということが1つあると思います。

それから、2つ目は、ずっとこれを見させていただきましたが、私は今の高校に必要なのは、キャリア教育だと思うのですが、その観点がどの学校も少し薄いかなと思います。ただ、先ほど辰野の例を申し上げましたが、地域に出掛けているということが体験学習になるんです。相当いろいろな体験をしているから、その体験を通して、自分の進路のことを考えられるようになるという、地域と大変結び付いていると、それ自体がキャリア教育になってきている面もあるのですが。

特に普通科単独の学校は、どうしてもこれが今必要なということが3点目です。

3点目は、つい最近も山口県の光高校であいう事件があった。もう進学系高校でも、問題行動の子が出てくる。これはもう長野県に出ても、全然不思議ではない現象だと思います。そうすると、かつてのようにある一部の地域高校だけの生徒指導の問題ではない。もう進学系高校も、すべて含めて、本当に生徒指導をどうしていくかという点について、もう少し知りたいと思います。血みどろの努力をしている学校を、私も幾つか知っていますけれども、非常に不十分だと思う学校もかなりあります。

その4点あたりを克服していると、地域の人からでない住民が、選択のときにその学校に信頼させる、生徒数が増えてくる。結局、生徒が少しでも行くようになって、行くというのも前向きに行く状況がつかれるかどうかとよく言われることであると思いますが。

今回は、地域と高校というのは、かなり話がききましたので、あとの3点について検討してほしいと思います。特に生徒指導については、さっき藤本先生がおっしゃったハードのことで言いますと、私はやはり、かつての高校生と大変変わってきていると思うんです。正直に言うと、変わるというのは、中学の状況がもう高校へ移ってきていると言ってもいいくらい、つまりかなりもう高校の先生も中学と同じような指導をしていかないと、今後なかなか大変だろうと。そうすると、小規模になってはいけないという話ばかりが出ていますが、あまり規模が大きくなってくると、生徒指導上の立場で考えますと非常に難しいかなと。どのくらいいるか分かりませんが、もう7、8になると、本当に難しくなる。特に、一見目立たない子の指導などはほとんどできないのではないかと思いますので、生徒指導の面からいうと、ある程度大きくならない規模がどうしても必要だだと思います。

以上です。

(池上委員長)

含蓄のあるお話を、ありがとうございました。

「魅力ある」ということは、このまま議論が続けられるのでございますが、私個人の問題かというように認識していますけど、実は正直に言うと、学校の実態がまったく分かりません。先ほど熊谷委員のお話にもありました。できましたら、学校の実態を、やはり声を聞く機会をぜひ持っていただきたいというように、私自身の教育のためにも思っていま

す。

それから、例えば、企業採用からみてまいりますと、学校の先生が企業の実態をどこまでご存じなのかということも、ある意味では、違う立場で視察等をしていただいて、認識していただくということが、私は大変重要なことだと思います。

ということで、そういう時間を、調整させていただいて取らせていただきたいと思っているのですが、このあたりは、関委員、そういう立場でいかがですか。

少しご意見をいただきたいと思います。

（関 委員）

学校に見に来ていただくということですか。

（池上委員長）

そうですね。

（関 委員）

ええ、見ていただくことは構いませんし、学校の内容も知っていただけるなら、それは結構でございます。

（池上委員長）

この件について、ほかの委員の皆さん、いかがですか。私はそう思っていますが。

（北原曜委員）

私も賛成です。特に、これだけ広い通学区ですから、それぞれの違う区のことについてよく分からない点がとてもあると思います。ですから、全部を見るというのはなかなか不可能かと思いますが、絞って見させていただいたら大変助かります。

（池上委員長）

ありがとうございました。

ほかの皆さんで、ぜひ、ご発言はいかがですか。

（小池委員）

先ほど皆さまのご意見があったわけですが、これからの社会に通用する人間は、つまるところ生活規範がしっかりしなければならないということだと思います、私もそれには大賛成なんです。私どもの学校でもさまざまなことをしっかりやっているつもりです。

ちょうどここ（資料）去年まで前期日程、自己推薦型の入試をやらなかったA高校とその他の高校のものとがあります。私はこれを見て、B高校には、非常に分かりやすい募集要項がある。そのことがそれぞれの高校ごとの理念を明確に表していくという部分で、大切なものだと考えています。

基本的な生活習慣が確立されている生徒とは、欠席・遅刻・早退とはどうか、提出物の期限などをきちんと守れること。B、校則や社会規約を守れること。C、あいさつなどが

きちんとできること。D、清掃活動や生徒会、委員会などをきちんとできること。どれを聞いても、生活習慣だと思うんです。このことは確かな生徒づくりに向けた具体性を示しているものだと思います。

今までは、高校でこんなことまで言わなくてもいいことだったわけです。このことは結局、こういう基本的な社会人としての生活規約を、高校生の場合、(卒業生の場合も含め)これをきちんとしていかななくてはならないという状態を表していることになりますが、募集要項でこのことを出しているということです。

分かりやすい高校教育を目指すという意味では、非常に参考になるなあと思っています。これが単に、知的学力には特に優れており、知的好奇心および探求心を持って多くの学習に意欲的に取り組むことができる、というような表現よりは、やはりいいのではないかと考えており紹介を兼ねて述べさせていただきました。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかに、いかがでございますか。

それでは、この件については、もうご賛成をいただいたという認識でおりまして、これから、一般社会からというような立場で、少し視察等を含めて、計画を事務局と調整をさせていただいて、やらせていただきたいと思います。

それぞれご多忙の皆さんでございますので、難しい側面はございますが、教育という問題で、大変重要な節目でございますので、ぜひご協力をいただきたいと思いますように考えております。

(小林委員)

その場合、全部回るのは、今、北原先生がおっしゃったように無理かと思うので、絞らざるを得ないかなと思うのですが、そのたびに対象になっている学校だけというようにならないようにお願いしたいというのがひとつです。

それから、もうひとつは、高校の参観というのは非常に難しくて、なかなか見にくいところがあるので、ある学校へ行ったら、現場の先生たちと話し合う時間を用意する。委員長さんがおっしゃったように、そういうことができる機会をぜひお願いしたい。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。もっともなご意見だと思います。

その関係で、手を挙げてもらいます。ほかにご意見があれば。

最もいい方向でやりたいと思いますが。

(北原曜委員)

その対象校と、普通科で言葉は悪いのですが、進学の少ないところ、いわゆる少し荒れ気味の問題です。その普通科の輪切りのところは大変問題があるかと思いますが、そこを特に重点的に見させていただきたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

熊谷委員、少し話をさせていただきますと、今の話の中で、社会の皆さんがどういうご要求を持っているか、要するに声を聞くというお話で、それが部会の設置ということに直結するかどうかは別として、何かそここのところにご意見がございますか。

(熊谷委員)

その部会につきまして、県教委がどのようにあえて設置要綱にまで入れたというのがよく分からない部分があるのですけれども、私が言う部会の案というものは、地域の声をいろんな社会から聞くということは、今回必要だというように言っているものですから、そのように地域でいろいろ、今の学校視察もそうですけれど、これは当然教員の皆さんと話をしているし、場合によっては生徒からも話を聞くかもしれませんけれども、そういったものも、当然必要だと思いますんですけど、一応要綱にも掲げてある部会が少なくとも声を聞く機構という案ございましたから、やはりただ単に出向いて行って、委員会が聞こうではないかということでしたらどうか若干その辺は整理しなければいけないなと思っています。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

では、今のご意見を集約して、内部調査をしてやりますので、またよろしく願いいたします。

それでは、あと15分でございますので、次回について調整をさせていただきたいと思いますが、これは事務局、いかがでございますか。

(野村主幹教育支援主事)

次回は第4回になりますけれども、7月20日ぐらいには考えるということでございます。実は、もう少し離れたところだと思って、皆さんのご予定などをチェックしていたのですが、なかなか7月末はお忙しい方が多くて、できるだけ末のほうになるよりも20日になるなら、私の記録のところでは、それなりの人数が集まるかなという感じでございました。

一応20日で調整させていただいて、今の段階で「20日は駄目だよ」という方がはっきりしておられましたら、この会が終わったところで、私のほうへちょっと声を掛けていただければありがたいなというふうに思っております。

(池上委員長)

どういう時間帯ですか。

(野村主幹教育支援主事)

午前中を、今は考えております。

(池上委員長)

今ここで、いかがですか。だいたいどのぐらいのご出席。

(野村主幹教育支援主事)

11 名になるかと思いますが。

(池上委員長)

ああ、そうですか。

ではまた、この次に伺って調整ということですね。

(野村主幹教育支援主事)

はい。

(池上委員長)

はい、分かりました。

ありがとうございました。

(北原曜委員)

第 1 回目のときだったと思うのですが、土日ははずしてくれということだったのですが、なかなか日程調整が、私は厳しいので、土日も考慮していただいたらなと思っております。

(野村主幹教育支援主事)

事務局としては、一向に差し支えありませんので、皆さんのところで、そのほうがということであればと思います。ただ、今までところは、土日にやったときに、皆さま方のご出席が少なからうということがございましたので、それは特にこちらのほうから、土日は、特別避けているというつもりはございません。

(小池委員)

会合を取るというと、土曜日にもほとんど会合が入っています。休日でもありますし、考えてほしいと思います。

(小林委員)

市長さんと村長さんは、私も土日のほうが、たくさん行事が入っていますので、ちょっと。

(池上委員長)

では、土日を回避すればいい。そこのところは予定が入ったという話ですね。

(北原曜委員)

夜でも結構ですけれども。

(熊谷委員)

日程を決めるとき、ぜひ、少なくとも7月20日には、8月の日程くらいは分かるくらいの気持ちで、早め早めに決めていただいたほうが調整するのにもいいと思いますので、なるべく、結構1週間程度で、次回次回とやられると調整がつかみませんので、ぜひ7月20日には、8月の2回の日程が決まるくらいのスタンスで入れていただければということ、お願いしたいと思います。

(池上委員長)

よく分かりました。そうですね。

(野村主幹教育支援主事)

今の点は本当におっしゃられるとおりだと思いますので、気を付けようと思いますけれども、実は日程をいただいておりますが、そのあとから、言い訳ですみませんけれども、入ってきたりするものですから、思った日にはどうしても出席的に人数が少ないということになってしまったという対応でございます。

机上に配布させていただきましたが、8月の日程の確認と、それから9月、10月まで、分かる範囲内で結構でございますが、およその目安をつけながら、やはりやりたいと思いますので、候補日を決めながら、またお知らせをしていったほうがよろしいかなと思いますので、またファックスでも構いませんので、お送りいただければありがたいなと思う次第でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

では、全般について何かご発言がございましたら、事務局お願いします。

(野村主幹教育支援主事)

よろしいですか。

すみません。本日の対応の中で、お求めになられた資料というものがあるかと思うのですが、先ほど一般論でいいからということで伺いましたが、例えば、農業高校と商業高校とを統合して総合学科をつくったときに、どのくらいの財政的な変化があるのかというような資料を、先ほど確かあったと思うのですけれども、そのほかにどんなことがあったか、最後にこの確認をお願いしたいのです。

(池上委員長)

今の事務局の話で、提出資料の内容についての確認をしたいということですが、分かった、そういうものがございませうか。

(小坂委員)

私立高校の資料をいただきましたけれども、第7区、第8区、第9区のそれぞれで、これは中学を調べれば分かると思うので、どういう私立、あるいは県立へ、どういう流れになっているのかという、やはり少し知っておく必要があるのではないかと。例えば、諏訪から甲府のほうへ流れていくのは、どういうところに行っているんだというようなことも、やはり、第7区、第8区、第9区で結構でございますけれども、市外へ出ている実態例を知りたいなというように、こんなふうに思っています。

(池上委員長)

これはいかがでございますか、事務局は。
よろしゅうございますか。

(野村主幹教育支援主事)

できるだけ努力します。

(北原曜委員)

データはないかもしれないのですが、工業高校に進学、あるいは工業科に進学する生徒の、本来の希望ですね。普通科へ行けなかったから、工業科に行ったというような案件というか、中学校のデータになるかもしれませんが、そういうものはあるのでしょうか。無理でしょうか。

(小池委員)

それぞれの指導が個別ですから難しいのではないのでしょうか。

(北原曜委員)

そうですね。

要は、普通科に行きたかったけれども、行けなかった。あるいは、もっと上級の普通科にも行きたかったけれども行けなかったという子どもたちが、向学心をなくしているわけです。それで、いろいろな荒れた状態ですとかを生み出しているのではないかと思うのですけれども、そういう例がどこかに関係するようなものがあれば。

(小池委員)

進路指導の問題や職業指導の問題などさまざまな場合もあるんですけれど、特に職業科を希望する場合については、目的性や課題を大切に進路指導をします。行ける学校より、行きたい学校、という方向でのそういう指導はしていますが -。

各校の中で、この子は普通科を希望していた、工業科に移ったとか、商業科に移ったとか、個々の学校でのデータはあるんですけれど、全体のデータはないですし、中学校側としては、東京がダメなら、大阪を等というような進路指導はしていませんし子どもが工業を希望するなら工業科で、商業ならば商業科を選ぶべきで、そういう指導をしているつもりです。

(藤本委員)

そのデータは、次回に出します。600 名ぐらいの生徒を対象に、農・工・商業科のデータを取ってありますので。

(北原曜委員)

それは、県内ですか。

(藤本委員)

県立高校の職業科、600 名ぐらいのデータを持っていますので、次回。

(北原曜委員)

全県のデータですか。

(藤本委員)

全県のデータです。

(北原曜委員)

全県のデータ。

ありがとうございます。

(藤本委員)

一部、飯田工業高校のデータもあります。昨年度、全県の職業高校にアンケートをとって、生徒 600 名ぐらいのデータをとりましたので、次回用意します。

(北原曜委員)

ありがとうございます。それは、助かります。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

ほかにございますかね。よろしゅうございますか。

それでは、今日は、冒頭に、くどくなりますが、財政問題についてのご発言がございまして、前回の内容の追認をいただけたと。ただし、慎重にかつ、内容を精査してやっていただきたいというご意見がございましたので、それはそれで正論だとそのとおりで、それでいきたいと思います。

次に、諏訪と上・下伊那問題でございましたが、これは「魅力ある高校づくり」ということを先行させて、しかるべき時期にその議論がまた当然必要でございしますので、それはさせていただくという方向でこれも行きたいと思います。

今回はまた、継続して、先ほどの視察、その他の計画を持ちながら、「魅力ある学校」の議論を継続したいと思います。

以上で今日の議論を終わりたいと思います。大変ありがとうございました。